

現代英語の変異性

——卓球審判におけるカタカナ英語——

杉 本 豊 久

0. はじめに

日本における近代スポーツの多くが英国から導入されたことから、これらのスポーツのルールブックは当然のことながら元々英語で記述されていた。それが日本語に翻訳され、日本の実情に合うように部分修正されて日本のルールブックが作成されてきたのが大方の現状である。卓球競技もその一つであり、したがって、英語で記述された国際卓球連盟 (The International Table Tennis Federation) 発行の『ハンドブック』を日本語に部分翻訳した『国際卓球ルール (2010-2011)』(日本卓球協会) や、日本の実情に合わせて部分修正されたルールブック『日本卓球ルールブック 2011 (平成 23 年版)』(日本卓球協会) や審判員用のガイドブック『卓球競技の審判法 2010: 審判員の手引き (平成 22 年改訂版)』(日本卓球協会: ルール・審判委員会) などの訳文には、多くのカタカナ英語が氾濫している。ところが、日本で行われている主要な卓球競技会においては、国際大会と同様に、審判の宣告(コール)は原則として「英語」で行われているという矛盾がある。¹この、訳文中の「カタカナ英語表現」(日本語)と、審判員用の「宣告(コール)英語表記」(口語英語)としてのカタカナ表現との間にかかなりの発音上の食い違いがあるということに実は大きな問題点が潜んでいる。²そこで、本論ではこれらのルールブックで採用さ

れている「カタカナ英語表現」と審判員用の「宣告（コール）英語表記」としてのカタカナ表現を取り上げ、その実態と問題点を明らかにし、さらにその解決策を提案する。

まず、どんな英語表現をカタカナで表すのかという問題がある。国際ルールはすべて英語で書かれているのだから、翻訳すべてをカタカナで表現するという方法もあるのだが、実際にはそのようにはなっていない。³ 当然のことながら、日本語表現が理解されやすいように、ある種の専門用語（ほとんどが名詞あるいは名詞相当語句）がカタカナで表現され、その他の英語表現は日本語に翻訳されているのである。たとえば、前述の『国際卓球ルール（2010-2011）』（日本卓球協会）では、2010年度版国際ルールが改定されたのを機に、国際卓球連盟発行の『ハンドブック』の第2章と第3章を翻訳し、英語と日本語を併記しており、その日本語訳の中にはカタカナ英語表記が相当の比率で使われている。また、『日本卓球ルールブック 2011（平成23年版）』（日本卓球協会）や『卓球競技の審判法 2010：審判員の手引き（平成22年改訂版）』（日本卓球協会：ルール・審判委員会）などにも、ほぼ同様のカタカナ英語表現やコール英語表記が多数みられる。

これらカタカナ英語表記には、その機能という点で大きく二つに分けることができる。すなわち、日本語訳の文章の中で用いられるカタカナ英語表記と、審判員による宣告（コール）の「英語発音」を表すカタカナ英語表記である。前者は、カタカナ英語表記といえども、日本語の文章の中で日本語の単語や表現として用いているのであって、いわば日本語である。つまり、翻訳の日本語の文章の円滑な理解を助けるためにカタカナ英語表現が使われているのである。これに対し、後者は英語発音を表す音声表記であって、いわば「発音記号」の役割を果たすものである。これらの「発音記号」としてのカタカナ英語表記は、特に『卓球競技の審判法 2010：

審判員の手引き（平成22年改訂版）』（日本卓球協会：ルール・審判委員会）において、その具体例が多数示されている。まず手始めに、カタカナ表記の全体像を概観してから、卓球審判に関連するカタカナ表記の位置付けと整理をしてから、その現状と問題点を指摘し、その解決策を提案する。

1. 日本語としてのカタカナ英語表現

1.0. その分類と役割

各種『ルールブック』や『審判法』の本文中に使われているカタカナ表現の中には、たとえば、「ツブラバー」の「ツブ」、「車イス」の「イス」、「タテ」、「ヨコ」、「ケイレン」、「ジャンケン」、「バラバラ」などのように、本来はひらがなや漢字で表記されていたものをあえてカタカナ表記した、いわば「日本語系カタカナ表現」ともいうべきものと、本来英語をはじめとした外国語からの借入語をカタカナ表記した、いわば「英語（外国語）系カタカナ表現」といえるものがある。

前者は大まかに分けて、普通名詞、固有名詞、擬態語、擬音語などをカタカナで表記する「標準従来型」と品詞や単語の境界にとらわれることなくカタカナ表記を柔軟に取り入れたり、ひらがなや漢字と連結させたり、省略形を複合的に取り入れた入りする「非標準最新型」とがある。それぞれを整理し、具体的事例を挙げると、おおむね次のようになる。

1) 日本語系カタカナ表現

i. 標準従来型

a. 普通名詞（難解な漢字表現、動植物の名称、その他）

ラーメン、ナマで誕生日、ハレの日の着物、15歳中学生にナニ

が、ゴミ捨てを禁止！、開運のツキ、ニンジン、ハゲタカ、国語ツボ、ゾウの鼻、旬のイカ、キャベツを使い切るワザ、等。

b. 固有名詞（人名、グループ名、地名、国名、その他）

カズの闘志、ウド VS. 梨花、アンパンマン、ピーコが涙、ビートたけし、コブクロ、タミフル、ジャニーズ、マリック大魔術！、ミミカ、ピングー、等。

c. 擬態語・擬音語

スクスク、スッキリ！、朝ズバッ！、キッパリ、大号泣ドッキリ！、脳林寺でポクポクチン、メッタ斬り！、バシヤッ！、等。

ii. 非標準最新型

a. 品詞分解型

エラいところへ嫁いでしまった、N速ホウ、絶品かもネ、おネエ、めちゃ×2イケてる！、あたしんち、ナンだ？、スゴイぞ、ニャンちゅうワールド放送局、世界の果てまでイッテQ！、2時っちゃオ！、ドへたカラオケ芸能人、ア然音痴、はねるのトびら、笑ってコラえて、ダメ夫、調べてゴ、等。

b. ひらがな・カタカナ・漢字・数字・アルファベット連結型

クモ男、クロ猫、とくダネ！、肩コリ、怒りオヤジ3、洋ラン、国語ツボ、エビづくし、大ゲンカ、ぜひモノ、朝ズバッ！、N速ホウ、世界の果てイッテQ！、めちゃ×2イケてる！、ニャンちゅうワールド放送局、ドへたカラオケ芸能人、ア然音痴、わんパーク、おはスタ、ナンだ？、英語でしゃべらナイト、とくダネ、ごみタワー、ドラえもん、ポチたま、セレブやせ、ぶっこギ、ゆるナビ、ためしてガッテン、にぎりズシ、等。

c. 省略型

食いタン（＜食いしん坊探偵）、オビラジR（＜帯番組ラジオ）、

ダイバスタ（<お台場スタジオ）、キンスマ（<金曜日スマップ）、クリケイ（<クリスタルケイ）、オリキュン（<オリエンタルラジオ胸キュン）、なつメロ、等。

d. 外来語日本語連結型

アドレな！、バリバリバリュー、モノイズム、億ション、おはスタ、英語でしゃべらナイト、やじうまプラス、おしゃれイズム、はなまるマーケット、わんパーク、おはスタ、2時っチャオ！、シネ通、等。

—杉本（2009b：85-86）

このような「日本語系カタカナ表現」は、いわゆる「英語（外国語）系カタカナ表現」とは分類上あるいは系統的に異なるものだが、その用法の背後にある心理的特性とその効果を分析すると、各種『ルールブック』や『審判法』の本文中に氾濫しているカタカナ表現の本質を垣間見るのに役立つかもしれない。

数年前、日本語系カタカナ表現のうち、特に「非標準最新型」に属するカタカナ表記を中心に、学生を対象としたアンケート調査を実施したことがある。⁴

その結果、次のような特性とその効果を確認できた。

- i) 強調性：注目を集めたり、インパクトを与えたりする効果を生む。つまり、ひらがなと漢字だけの表記にカタカナが入ると、それだけでインパクトを与えることになり、強調効果が生ずる。例えば、ひらがなを使った「めった斬り」よりも、カタカナを使って「メッタ斬り」と表現した方が、何か鮮やかなあるいは豪快な切り方を連想するのはそのためである。
- ii) 簡潔性・明晰性：簡潔で平易なので、分かりやすさという効果を

生む。例えば、「禿鷹」、「洋蘭」、「大喧嘩」などのように、漢字で表記すると複雑すぎて難度が高くなるので、それぞれ「ハゲタカ」、「洋ラン」、「大ゲンカ」のようにカタカナを用いることにより、簡潔性・明晰性を強調し、平易さ・わかりやすさという効果を生むことになる。

- iii) 新鮮・爽快性・現代的なエネルギー：カタカナの持つ視覚的エネルギー、即ちシャープで新鮮さを感じさせる効果が、ひらがたと漢字だけの文章の中で際立ち、新しい爽快な心理的效果を生む。例えば、「N速ホウ」では、一部カタカナを入れることで、略字とカタカナそのものが現代風で、爽快なイメージを伝える効果を生み、読むものに興味を抱かせるエネルギーとなる。
- iv) 音響性・口語性：音響的で、話し言葉を連想させるので、親密で気軽な雰囲気をもたらす効果を生む。例えば、「絶品ものネ」の「ネ」や、「あたしんち」の「ン」だけをカタカナ表記することにより、口語的で肩の凝らない会話の雰囲気を醸し出す効果がある。
- v) 欧米（洋風）性：外来語（それも主として英語）に由来するカタカナ表現使用の背後には、外国文化、それも欧米文化への志向性や根強い憧憬を彷彿させる。例えば、「おしゃれイズム」、「モノイズム」、「億ション」などは、その背後に、欧米の合理主義思想や裕福な暮らしを志向する日本人の心理が見え隠れする。
- vi) 多義性・ギャグ性：言葉の遊び的な効果を生み、その背景には日本語の古文にみられる掛詞の伝統を連想させる。例えば、「とくダネ！」は「得だね！」と「特種」の二つの意味を、また「2時っチャオ！」は「2時に見ちゃおう」と「(2時っ) チャオ！」（「チャオ」はイタリア語由来の一種の挨拶用語で“ヤッホー！”ぐらいの意味）の二つの意味を含意しており、一瞬のうちに複合的なイメー

ジを連想できると同時に、インパクトもそれだけ強くなる。この用法は、いわゆる駄洒落の一種であろうが、元をたどれば、古文にみられる「掛詞」の手法に通ずるものでもあり、日本文化（言語）の伝統を受け継いでいると同時に、それが現代の若者のギャグ文化と見事にマッチしているといえよう。

vii) 弁別性・区別性：ひらがなや漢字の表記との明確な違いを示す効果を生む。例えば、「エラいところに嫁いでしまった」の「エラ」は、漢字の「偉い」が意味する肯定的なイメージではなく、「程度がはなはなだしくひどい」、つまり「えらく大変（厳し）そうな家へ嫁いでしまった」という、むしろ否定的なイメージを含意させることを意図し、あえてカタカナ表記することによりその違いを「区別・弁別」という効果がある。

viii) バランス性：日本語の書き言葉にみられる独特の複合表記型システム、つまりひらがな・カタカナ・漢字・数字・各種記号・ローマ字などを複合的に使用できる表記システムを用いることにより、メリハリの利いたバランスの良い表現を生む効果がある。例えば、「めっちゃ×2イケてる」という表記は、「めっちゃめっちゃイケてる」のようにひらがなのみで表記すると、文字数が多くて見た目がパットせず、しかもひらがなの持つやわらかい字体が全体として締りのない印象を与える。そこで、このように「×2」という記号と数字を盛り込むことにより、アクセント（メリハリ）が付き、さらにその後で「イケ」というカタカナ表記を盛り込むことにより、カタカナ表記のもつ角々した感じが引き締まった印象を与え、全体として漢字のもつ難解さ・硬さを和らげると同時に、ひらがな・記号・数字・カタカナのコンビで軽妙かつ爽快なバランスを保っている。⁵

各種『ルールブック』や『審判法』の本文中に使われているカタカナ表

現の場合、基本的には、日本語で表記しにくい、あるいは日本語では分かりにくい専門用語をカタカナで表記することによって、より明確かつ正確なルールの理解を促すという目的がある。したがって、上記のようなカタカナの諸効果を複合的に意識したとは考えにくい、8種類の効果のうち、「ii）簡潔性・明晰性：分かりやすさ・平易さの効果」を生んでいることは確かであろう。たとえば、「ツブ」、「イス」、「タテ」、「ヨコ」、「ケイレン」などはこれらに対応する漢字表現「粒」、「椅子」、「縦」、「横」、「瘻癩」などと比べると、明らかにより簡潔・明晰で平易である。しかし、この種のカタカナ表現は、各種『ルールブック』や『審判法』の本文中には、あまり使われてはいない。前述の、「ツブラバー」の「ツブ」、「車イス」の「イス」、「タテ」、「ヨコ」、「ケイレン」、「ジャンケン」、「バラバラ」など、数例に留まっている。

2) 英語系（外国語系）カタカナ表現

一方、圧倒的多数を占めるのは、本来英語をはじめとする外国語であった語句や表現をカタカナ表記した、いわゆる「英語（外国語）系カタカナ表現」である。これらについても同様に、上記の目的に沿って、より正確なルールの理解を促すために用いているのであるから、簡潔性・明晰性を目的とし、その内容の分かりやすさ・平易さの効果を意図するものである。

1.1. その現状

まず、『国際卓球ルール（2010-2011）』（日本卓球協会）、『日本卓球ルールブック 2011（平成 23 年版）』（日本卓球協会）、および『卓球競技の審判法 2010：審判員の手引き（平成 22 年改訂版）』（日本卓球協会：ルール・審判委員会）で使われている「英語系カタカナ表現」の一覧を次に示す。

【『国際卓球ルール（2010-2011）』（日本卓球協会）におけるカタカナ表現】

ルール (rule)、ハンドブック (handbook)、テーブル (table)、プレーイングサーフェス (playing surface)、サイド (side)、バウンド (bound, bounce)、エッジ (edge)、サイドライン (side line)、エンドライン (end line)、ネット (net)、コート (court)、ダブルス (doubles)、センターライン (center line)、ハーフコート (half court)、ライトハーフコート (right half court)、ネットアセンブリ (net assembly)、サポート (support)、ボール (ball)、セルロイド (celluloid)、プラスチック (plastic)、ラケット (racket)、ガラス (glass)、ゴム (gum)、サンドイッチラバー (sandwich rubber)、ソフトラバー (soft rubber)、ツブラバー (pimpled rubber：日本語カタカナ英語複合結合型)、スポンジ (sponge; cellular)、マッチ (match)、ラリー (rally)、インプレー (in play)、サービス (service)、フリーハンド (free hand)、レット (let)、ポイント (point)、ラケットハンド (racket hand)、フリーアーム (free arm)、オブストラクション (obstruction)、サーバー (server)、レシーバー (receiver)、パートナー (partner)、リターン (return)、プレー (play) 順序、シングルス (singles)、レシーブ (receive)、シート (seat)、クッション (cushion)、フットレスト (footrest)、ゲーム (game)、ポイントスコア (point score)、オープン (open) 大会、エントリー (entry)、グループ (group)、オリンピック (Olympic)、パラリンピック (Paralympic)、エグゼクティブ・コミTEE (Executive Committee)、エントリーフォーム (entry form)、エントリー (entry)、テクニカル・リーフレット (Technical Leaflets)、ハンドブック (Handbooks)、トーナメントレフェリーハンドブック (Tournament Referee's Handbooks)、ブランド (brands)、メーカー (maker; supplier)、ロゴ (logo)、プラス (plus)、リスト (lists)、サイト (site)、ノースリーブシャツ (no-sleeve shirts; sleeveless shirt)、ショーツ (shorts)、スカート (skirt)、スポーツ (sports)、シューズ (shoes)、トレーニングスーツ (training suit; track suit)、ク

ラブ (club)、レタリング (lettering)、ゼッケン (panel)、マーク (mark)、デザイン (design)、カウント (count) 器、タオル (towel)、フェンス (fence)、フロアマット (floor mat)、ルクス (lux)、レンガ (brick)、セラミックス (ceramics)、コンクリート (concrete)、マット (mat)、ラケットコントロール (racket control)、プロツアートーナメント (Pro Tour tournaments; competitions)、ジュニアサーキット (Junior Circuit)、ラケットコントロールセンター (racket control centre)、ペナルティー (penalties)、フェンス (fence)、ダイオード (diodes)、シンボルマーク (symbols; symbol marks)、オレンジ (orange)、マーキング (markings)、ネーム (name)、ゼッケン (players' numbers; Rückennummer)、タバコ (tobacco)、ドーピングコントロール (doping control)、ジュニア (junior)、アンチドーピング機関 (Anti-Doping Organization)、ドーピング検査 (testing; doping testing)、ドロー (draw)、スケジュール (schedule)、ストロークカウンター (stroke counter)、トス (draw; toss)、バッドマナー (breaches of the behavior regulations; bad manner)、オブストラクション (a player obstructs the ball; obstruction)、ガイド (guide)、ストローク数 (the number of strokes)、インターバル (intervals)、タイムアウト (time-out)、アドバイザー (adviser)、ホワイトカード (white card)、ストレス (stress)、ペナルティー (penalty)、レッドカード (red card)、イエローカード (yellow card)、コーチ (coach)、ペナルティーポイント (penalty points)、レベル (level)、エントリー (entry)、マナー (manner)、タイトル (title)、メダル (medal)、ランキングポイント (ranking points)、グッドプレゼンテーション (good presentation)、プレゼンテーション (presentation)、シード (seed)、ランキング (ranking)、ランク (rank)、トーナメント (tournament)、ラウンド (rounds)、ランキングリスト (ranking list)、ミス (errors; miss)、シニア (Senior)、ベテランオープン (Veterans' Open)、エントリーフォーム (entry forms)、ユース (youth)、カデット (cadet)、リーグ (group basis; league)、トーナメント (knockout basis; tournament)、メンバー

(member)、ジユリー (the Jury)、アルファベット (letter; alphabet)、ペア (pair)、テレビジョン (television)、テレビ化 (televising)、タイトル (title)、アスリート委員長 (the chairman of the Athletes' Commission)、等。

【『日本卓球ルールブック 2011 (平成 23 年版)』(財団法人 日本卓球協会)におけるカタカナ英語表現】

ルール (rule)、ポイント (point)、クリーン (clean)、ラケット (racket)、ラバー (rubber)、タイミング (timing)、ラケットコントロール (racket control)、ペナルティー (penalty)、マッチ (match)、サービス (service)、サーバー (server)、レット (let)、レシーブ (receive)、ボール (ball)、ダブルヒット (double hit)、シート (seat)、クッション (cushion)、テーブル (table)、フットレスト (foot rest)、ダブルス (doubles)、センターライン (center line)、ゲーム (game)、ポイントスコア (point score)、インプレー (in play)、ラリー (rally)、レシーバー (receiver)、リターン (return)、エントリー (entry)、ネットアセンブリ (net assembly)、エンドライン (end line)、ラバー (rubber)、マーク (mark)、メーカー (maker)、ロゴ (logo)、グリップ (grip)、チーム (team)、デザイン (design)、フェンス (fence)、セラミックス (ceramics)、コンクリート (concrete)、マット (mat)、ラケットコントロールセンター (racket control centre)、ボランティア検査 (voluntary test)、ダイオード (diode)、レタリング (lettering)、シンボルマーク (symbol mark)、オレンジ (orange)、クラブ名 (club name)、タイムアウト (time out)、タオル (towel)、エンド (end)、アドバイス (advice)、ベンチ (bench)、バッドマナー (bad manner)、タイトル (title)、メダル (medal)、ランキングポイント (ranking point)、リーグ戦 (group based; league)、メンバー (member)、プレー (play)、カウンタ器 (count)、フォールト (fault)、ゲーム (game)、ラケット (racket)、サーバー (server)、ラケットコントロール (racket control)、ドーピングコントロール (doping control)、ストロークカウンター

(stroke counter)、トーナメント (tournament)、エントリー (entry)、ガイドライン (guideline)、ラージボール (large ball)、等。

【日本卓球ルール 2011 (平成 23 年)】

【基本ルール】

アンダーライン (underline)、プレーイングサーフェス (playing surface)、サイドライン (side line)、エッジ (edge)、エンドライン (end line)、センターライン (center line)、ハーフコート (half court)、ライトハーフコート (right half court)、ネットアセンブリ (net assembly)、セルロイド (celluloid)、プラスチック製 (plastic)、ブレード (blade)、ガラス (glass) 繊維、サンドイッチラバー (sandwich rubber)、ソフトラバー (soft rubber)、ツブラバー (pimpled rubber: 日本語カタカナ英語複合結合型)、スポンジ (sponge)、フリーアーム (free arm)、オブストラクション (obstruction)、パートナー (partner)、リターン (return)、シングルス (singles)、ポイント (point)、バウンド (bound)、アドバイザー (adviser)、ダブルヒット (double hit)、クッション (cushion)、フットレスト (foot rest)、インプレー (in play)、等。

【競技ルール】

タイトル (title)、エントリー (entry)、レフェリーハンドブック (referee handbook)、ロゴ (logo)、ユニホーム (uniform)、ワッペン (Wappen)、グリップ (grip)、エッジ (edge) 周り、ノースリーブシャツ (no sleeve shirts)、ショーツ (shorts)、スカート (skirt)、シューズ (shoes)、トレーニングスーツ (track suit; training suit)、ショート・パンツ (short pants)、ハーフ・パンツ (half pants)、サポーター (supporter)、リストバンド (wristband)、ヘアバンド (hair band)、スパッツ (spats)、デザイン (design)、ロゴマーク (logo mark)、レタリング (lettering)、ゼッケン (Rückennummer: ドイツ語)、タオル (towel) 入れ、フロアマット (floor mat)、ルックス (lux)、レンガ (bricks)、セ

ラミックス (ceramics)、コンクリート (concrete)、シート (seat)、ラバークリーナー (rubber cleaner)、スケジュール (schedule)、ストロークカウンター (stroke counter)、トス (toss)、バッドマナー (bad manner)、タイムアウト (time-out)、ガイド (guide)、マッチテーブル (match table)、ストレス (stress)、ベンチ (bench)、レッドカード (red card)、イエローカード (yellow card)、レベル (level)、タイトル (title)、メダル (medal)、ランキングポイント (ranking point)、ドーピング (doping)、ドーピングコントロール (doping control)、ランキングリスト (ranking list)、マスターズ (masters)、ジュニア (junior)、カデット (cadet)、ホープス (hopes)、カブ (cub)、バンビ (bambi)、アルファベット (alphabet)、オーダーミス (order miss)、アキレス腱 (Achilles tendon) 切断、ラウンドロビン方式 (round-robin)、トーナメント (tournament)、ドロー (draw) される、ラージボール (large ball)、ラージサイズ (large size)、レクリエーション (recreation)、表ソフト (soft)、テープ (tape)、2ポイントリード (2 points lead) した競技者、レシーブ (receive) する、ブランド (brand)、ダブルスペア (doubles pair)、ゼスチャー (gesture)、スロープレー (slow play)、ダークカラー (dark colour)、ダークレッド (dark red)、ダークブルー (dark blue)、ダークグリーン (dark green)、ダークパープル (dark purple)、ブラック (black)、ブルー (blue)、グリーン (green)、レッド (red)、オレンジ (orange)、ブラウン (brown)、マロン (marron)、ペンホルダーラケット (pen holder racket)、レフェリー (referee)、ブロック (block)、テスト (test)、リーダー (leader)、等。

【審判宣告（コール）用語におけるカタカナ表記】

『日本卓球ルールブック 2011』の「付録 1」(p.26 ~ 28) より
「A ヴァーサス X。」(“A versus X.”)
「A 選手対 X 選手の試合を行います。」

「ベスト オヴ 5 (7)。」 (“Best of 5 (7).”)

(「ベスト オヴ ファイヴ (セヴン)。」)

「5 (7) ゲーム制の試合です。」

「ファースト ゲーム。A トゥ サーヴ。ラヴオール。」 (「ラヴ オール。」)

(“First game. A to serve. Love all.”)

「第1ゲームです。A選手のサーブです。0対0で(試合)開始です。」

「11 - 9。ゲーム トゥ A。」 (“11-9. Game to A.”)

(「イレヴン-ナイン。ゲーム トゥ A。」)

「11対9で、このゲームはA選手の勝ちです。」

「セカンド ゲーム。X トゥ サーヴ。ラヴ オール。」

(“Second game. X to serve. Love all.”)

「第2ゲームです。X選手のサーブです。0対0で(試合)開始です。」

「12 - 10。ゲーム トゥ X。」 (12-10. Game to X.”)

(「トゥウェルヴ-テン ゲーム トゥ X。」)

「12対10で、このゲームはX選手の勝ちです。」

「サード ゲーム。A トゥ サーヴ。ラヴ オール。」

(“Third game. A to serve. Love all.”)

「第3ゲームです。A選手のサーブです。0対0で開始です。」

「11 - 8。ゲーム トゥ X。」 (“11-8. Game to X.”)

〔イレヴン－エイト。ゲーム トゥ X。〕

〔11 対 8 で、このゲームは X 選手の勝ちです。〕

〔フォース ゲーム。 X トゥ サーヴ。 ラヴ オール。〕

〔“Fourth game. X to serve. Love all.”〕

〔第 4 ゲームです。 X 選手のサーヴです。 0 対 0 で開始です。〕

〔11－5。ゲーム トゥ A。〕〔“11-5. Game to A.”〕

〔イレヴン－ファイヴ。ゲーム トゥ A。〕

〔11 対 5 で、A 選手の勝ちです。〕

〔ファイナル (フィフス) ゲーム。 A トゥ サーヴ。 ラヴ オール。〕

〔“Final (Fifth) game. A to serve. Love all.”〕

〔11－9。ゲーム アン (ド) マッチ トゥ A。〕

〔“11-9. Game and match to A.”〕

〔イレヴン－ナイン。ゲーム アン (ド) マッチ トゥ A。〕

〔11 対 9 で、このゲームは A 選手の勝ちです。したがってこの試合は A 選手の勝ちとなります。〕

〔レット〕〔“Let.”〕、〔フォールト〕〔“Fault.”〕、〔ウロンサイド〕〔“Wrong side.”〕、〔コレクション〕〔“Correction.”〕、〔ネット〕〔“Net.”〕、〔ストップ〕〔“Stop.”〕、〔サイド〕〔“Side.”〕、〔タイム〕〔“Time.”〕、〔タッチトネット〕〔“Touched net.”〕、〔ムーヴドテーブル〕〔“Moved table.”〕、〔ハンド・オン・テーブル〕〔“Hand on table.”〕、〔オブストラクション〕〔“Obstruction.”〕、〔ダブルバウンス〕〔“Double bounce.”〕、〔ダブルヒット〕〔“Double hit.”〕、〔ウロンプレーヤー〕〔“Wrong

player.”)、等。

(句読点の一部を筆者が修正)

【『卓球競技の審判法 2010：審判員の手引き（平成 22 年改訂版）』（日本卓球協会：ルール・審判委員会）におけるカタカナ英語表現】

アドバイザー (adviser)、コミュニケーション (communication)、ルールブック (rule book)、ストロークカウンター (stroke counter)、カウント (count)、オペレーター (operator)、ラリー (rally)、インプレー (in play)、ボール (ball)、タイミング (timing)、ベンチサイド (bench side)、コレクション (correction)、ジェスチャー (gesture)、ベンチ (bench)、コート (court)、ネットコードサービス (net code service)、タイムキーパー (time keeper)、ゲーム (game)、タイムアウト (time-out)、レシーバー (receiver)、カウント器 (count)、ボールパーソン (ball person)、ポイントスコア (point score)、テーブル (table)、スコア (score)、フロア (floor)、バッジ (badge)、ボタン (button)、フォールト (fault)、サービス (service)、エッジ (edge)、マッチスコア (match score)、アナウンス (announce)、チーム (team)、シード (seed)、ストップウォッチ (stop watch)、ネットゲージ (net gage)、イエロー (yellow)、レッド (red)、ホワイトカード (white card)、ポケット (pocket)、プレーイングサーフェス (playing surface)、フェンス (fence)、オーダー (order)、マッチ (match)、サイン (sign)、バッド・マナー (bad manner)、アドバイス (advice)、ゼッケン (Rücknummer：ドイツ語)、マーク (mark)、ユニフォーム、ユニホーム (uniform)、ロゴ (logo)、メーカー (maker)、ラケット (racket)、ラバー (rubber)、チェック (check)、ペンホルダー (pen holder)、サービスルール (service rule)、レシーブ (receive)、エンド (end)、ダブルス (doubles)、サーバー (server)、タイムキーパー (time keeper)、「タイム」(“Time.”)、「ストップ」(“Stop.”)、「レット」(“Let.”)、ヴァーサス (versus)、ベスト (best)、オヴ (of)、ファースト (first)、セカンド (second)、サード (third)、フォース (fourth)、フィフス (fifth)、ファイナル

(final)、セブンス (seventh)、ゲーム (game)、トウ・サーヴ (to serve)、「ラヴ
オール」(“Love all.”)、サーバー (server)、「ワン・ラヴ」(“One-love.”)、「ラヴ・
ワン」(“Love-one.”)、「トウ・ラヴ」(“Two-love.”)、「ワン・オール」(“One-all.”)、
インプレー (in play)、サービス (service)、サムアップ (thumb up)、レット
(let)、ネットアセンブリ (net assembly)、レシーバー (receiver)、プレーイング
サーフェス (playing surface)、ルール (rule)、バウンド (bound)、ライトハーフ
コート (right half court)、ネットコードサービス (net code service)、リターン
(return)、コール (call)、「フォールト」(“Fault.”)、「チェンジサービス」(“Change
service.”)、「スロープレイ」(“Slow play.”)、「プレイ」(“Play.”)、エッジボール
(edge ball)、テーブル (table)、サイドラインエッジ (side line edge)、サイド
(side)、エッジボール (edge ball)、「タッチトネット」(“Touched net.”)、ラケット
(racket)、「ムーブドテーブル」(“Moved table.”)、ストップパー (stopper)、「ハ
ンドオンテーブル」(“Hand on table.”)、フリーハンド (free hand)、「オブスト
ラクション」(“Obstruction.”)、「ダブルバウンス」(“Double bounce.”)、バウン
ド (bound)、「ダブルヒット」(“Double hit.”)、「ウロンプレーヤー」(“Wrong
player.”)、サービス (service)、レシーブ (receive)、ハーフコート (half court)、
「バッドマナー」(“Bad manner.”)、イエローカード (yellow card)、レッドカー
ド (red card)、ポイント (point)、カード (card)、カウント器 (count)、マーカー
(marker)、アドバイザー (adviser)、タイムアウト (time out)、ホホワイトカード
(white card)、タイムキーパー (time keeper)、ゲーム (game)、インプレー (in
play)、リターン (return)、「ゲーム・トウ・〇〇」(“Game to 00.”)、ベンチ
(bench)、ファイナルゲーム (final game)、エンド (end)、マッチ (match)、「ゲ
ーム・アンド・マッチ・トウ 〇〇」(“Game and match to 00.”)、ゲームスコ
ア (game score)、フェンス。(fence)、サポート (support)、ネット (net)、プラ
スチック (plastic)、ネットテンションゲージ (net tension gage)、マッチスコア
(match score)、ストップウォッチ (stop watch)、スタート (start)、フォールト

(fault)、エッジボール (edge ball)、サイドラインエッジ (side line edge)、イエローマーカー (yellow marker)、ストロークカウンター (stroke counter)、オペレーター (operator)、タオル (towel)、リセット (reset)、ファイナルゲーム (final game)、フリーハンド (free hand)、ネットコードサービス (net code service)、ネットイン (net in)、エッジボール (edge ball)、ロス (loss)、マナー (manner)、ペナルティー (penalty)、ポイントスコア (point score)、ハンドシグナル (hand signal)、ショーマンシップ (showmanship)、スポーツ (sport)、ブレザー (blazer (coat))、ズボン (trousers, pants)、Tシャツ (T-shirt)、セーター (sweater)、セット (set)、ネットアセンブリ (net assembly)、プラスチック製 (plastic)、テスト (test)、コルク (cork)、フィルム (film)、グリップ (grip)、シート (seat)、メーカー (maker)、レフェリー (referee)、ネットゲージ (net gage)、ラバーリスト (rubber list)、ウェブサイト (web site)、ボランティア検査 (voluntary)、ペナルティー (penalty)、リバウンド (rebound)、クラブ (club)、シャツ (shirt)、ショーツ (shorts)、スカート (skirt)、デザイン (design)、スローガン (slogan)、メッセージ (message)、ヘッドギア (head gear)、スパッツ (spats)、サイクリングショーツ (cycling shorts)、ヘアバンド (hair band)、サポーター (supporter)、リストバンド (wrist band)、短パン (pants)、タイツ (tights)、トレーニングスーツ (track suit; training suit)、アンダーシャツ (under shirt)、ロゴ (logo)、インターバル (interval)、ラケットハンド (racket hand)、ペナルティーポイント (penalty point)、スピン (spin)、パートナー (partner)、ロス (loss)、リズム (rhythm)、タオル (towel)、ダブルスペア (doubles pair)、サーティーン (thirteen)、ストローク (stroke)、イエローマーカー (yellow marker)、レッドマーカー (red marker)、メッセンジャー (messenger)、シグナル (signal)、スムーズ (smooth)、「フォー・オール」 (“Four all.”)、「ラヴ」 (“Love”)、ハンドシグナル (hand signal)、フォールト (fault)、等。

1.2. その問題点・矛盾点

各種『ルールブック』や『審判法』の本文中に現れるカタカナ表現のほとんどは「英語系カタカナ表現なのだが、これらはすでに指摘したように外来語として早くから日本語の中に取り入れられ、定着したものを「モデル」としてカタカナ語化されたもので、この中には、カタカナ表記をそのまま日本語として発音すると、元となった英語の発音からかなりかけ離れたものになってしまうものが多々ある。そのようなものを収集して、いくつかのタイプに分類し、その原因を分析・検討する。

1.2.1. 子音のカタカナ表記の問題点

1) [v] の表記：「バ」、「ビ」、「ブ」、「ベ」、「ボ」

英語の [v] は、「有声・唇歯・摩擦音 (voiced labio-dental fricative)」であり、上の歯を下の唇に軽く触れさせ、声帯を振動させながら、滑らかに息を出して発音する。ところが、日本語の「バ」、「ビ」、「ブ」、「ベ」、「ボ」は、「有声・両唇・閉鎖音 (voiced bilabial stop)」であり、両方の唇を強く結んで、それから口を開く瞬間にパット息を開放し、声帯を振動させて発音する。英語の [b] に相当する。ところが、英語の [v] と [b] の音を両方とも、「バ」、「ビ」、「ブ」、「ベ」、「ボ」で表記するため、両者の発音上の区別をつけにくいという問題がある。

[v]

of：「オブ」、serve：「サーブ」、"Love all."：「ラブ オール」、receiver：「レシーバー」、executive committee：「エグゼクティブ・コミティ (K-18)⁶、エグゼクティブコミッティ (K-48)、service：「サービス」、server：「サーバー」、receive：「レシーブ」、interval：「インターバル」、adviser：「アドバイザー」、level：「レベル」、television：「テレビジョン」、voluntary test：「ボランティア検査」、等。

[b]

rubber : 「ラバー」、handbook : 「ハンドブック」、table : 「テーブル」、
bound : 「バウンド」、ball : 「ボール」、brand : 「ブランド」、bench : 「ベ
ンチ」、等。

2) [t] の表記 : 「タ」、「ティ」、「トゥ」、「テ」、「ト」

英語の [t] は「無性・歯茎・閉鎖音 (voiceless alveolar stop)」であり、
舌先を上歯の歯茎に押し付け、それを離す際にパット息を出し、声帯を
震わせずに発音する。ところが、日本語の [t] は「無声・歯・閉鎖音
(voiceless dental stop)」であり、舌先は上歯につけて発音する点が英語と
異なるという問題がある。また [ti] と [tu] の組み合わせが日本語に
ないため、「ティ」、「チ」、「トゥ」、「ツ」などで表現する傾向があり、
英語音から離れてしまうという問題がある。

center line : 「センターライン」、computer : 「コンピュータ」、net : 「ネッ
ト」、shorts : 「ショーツ」、web site : 「ウェブサイト」、shirt : 「シャツ」、
skirt : 「スカート」、racket : 「ラケット」、partner : 「パートナー」、let :
「レット」、return : 「リターン」、table : 「テーブル」、two : 「トゥー」、
fault : 「フォールト」、等。

3) [l] と [r] の表記 : 「ラ」、「リ」、「ル」、「レ」、「ロ」

日本語には、一般に音素 /l/ と /r/ の区別はないので、これらをカタ
カナ表記する際にすべて「ラ」、「リ」、「ル」、「レ」、「ロ」を用いる。と
ころが、英語の [l] は「有声・歯茎・側音 (voiced alveolar lateral)」で
あり、舌の先端を上歯の歯茎に押し当てて息を出す。舌の両側 (あるいは片
側) はどこにも触れていないので、息は舌のまわり (あるいは片

側) をすり抜けていく。日本語にはこの音素 /l/ はないので、「弾音 (flapped r)」の「ラ」、「リ」、「ル」、「レ」、「ロ」で代用し、[r] のカタカナ表記と重なることになる。しかも、英語の [r] は「有声・後部歯茎・半母音 (voiced postalveolar semivowel)」であり、舌尖を歯茎に叩いて出す日本語の [r] とは異なる。即ち、母音 [a] 音を出しながら、下の先端を後部歯茎に向かって持ち上げて、歯茎や口蓋に触らないで口の奥の方に反らせば [r] 音が出るのだが、「ラ」、「リ」、「ル」、「レ」、「ロ」のカタカナで表記されることが多いので、これらを日本語の「弾音」で代用することになり、英語本来の原音とは異なる発音となってしまうという問題がある。

[1]

playing surface : 「プレーイングサーフェス」、side line : 「サイドライン」、doubles : 「ダブルス」、half court : 「ハーフコート」、net assembly : 「ネットアセンブリ」、ball : 「ボール」、celluloid : 「セルロイド」、plastic : 「プラスチック」、glass : 「ガラス」、rally : 「ラリー」、let : 「レット」、play : 「プレー」、singles : 「シングルス」、Olympic : 「オリンピック」、Paralympic : 「パラリンピック」、logo : 「ロゴ」、plus : 「プラス」、list : 「リスト」、club : 「クラブ」、lettering : 「レタリング」、towel : 「タオル」、floor mat : 「フロアーマット」、等。

[r]

rule : 「ルール」、right : 「ライト」、racket : 「ラケット」、rubber : 「ラバー」、rally : 「ラリー」、free hand : 「フリーハンド」、obstruction : 「オブストラクション」、return : 「リターン」、receive : 「レシーブ」、footrest : 「フットレスト」、group : 「グループ」、interval : 「インターバル」、rank : 「ランク」、等。

4) [f] と [h] の表記 : 「ファ」、「ハ」、「フィ」、「ヒ」、「フ」、「ヘ」、

「フェ」、「ホ」、「フォ」

英語の〔f〕は「無声・唇歯・摩擦音 (voiceless labio-dental fricative)」であり、上歯を下の唇に軽く触れさせ、声帯を振動させないで息を出して発声する。ところが、日本語の子音体系にはこの〔f〕がないので、「両唇摩擦音」〔Φ〕、「硬口蓋摩擦音」〔ç〕 および「声門・摩擦音」〔h〕などで代用し、「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」や「ファ」「フィ」「フ」「フェ」「フォ」で表記する。一方、英語の〔h〕は、「無声・声門・摩擦音 (voiceless glottal fricative)」であり、日本語の「ハ、ヘ、ホ」についてはほぼ問題ないが、母音〔u〕の前では〔hu〕が〔Φu〕に、母音〔i〕の前では〔hi〕が〔çi〕になりやすいという問題がある。

〔f〕

footrest : 「フットレスト」、fence : 「フェンス」、fault : 「フォールト」、soft rubber : 「ソフトラバー」、free arm : 「フリーアーム」、referee : 「レフリー」、uniform : 「ユニホーム、ユニフォーム」、floor mat : 「フロアマット」、alphabet : 「アルファベット」、first : 「ファースト」、fourth : 「フォース」、fifth : 「フィフス」、free hand : 「フリーハンド」、film : 「フィルム」、"Four all." : 「フォーオール」、等。

〔h〕

double hit : 「ダブルヒット」、half court : 「ハーフコート」、hair band : 「ヘアバンド」、hopes : 「ホープス」、pen holder : 「ペンホルダー」、"Hand on table" : 「ハンドオンテーブル」、hand signal : 「ハンドシグナル」、等。

5) 〔θ〕と〔ð〕の表記 : 「サ」、「シ」、「ス」、「セ」「ソ」 ; 「ザ」、「ジ」「ズ」、「ゼ」、「ゾ」

英語の〔θ〕と〔ð〕は「無声 (有声) ・歯・摩擦音 (voiceless (voiced))

dental fricative)」で、舌の先端を上下の歯の間に挟んで（あるいは添えて）、そのままの状態強く息を出して発音する。その際、声帯を震わせなければ〔θ〕となり、震わせれば〔ð〕となる。日本語にはこの音素はないので、前者は〔s〕で、後者は〔z〕、〔dz〕、〔dʒ〕などで代用し、「サ」、「シ」、「ス」、「セ」、「ソ」；「ザ」、「ジ」、「ズ」、「ゼ」、「ゾ」などで表記する。それぞれ英語音とは異なるという問題がある。

〔θ〕

third game : 「サードゲーム」、fourth game : 「フォースゲーム」、fifth game : 「フィフスゲーム」、seventh : 「セブンス」、thumb up : 「サムアップ」、thirteen : 「サーティーン」、nothing : 「ナッシング」、thigh : 「サイ」、teeth : 「ティース」、thank : 「サンク」、thick : 「シック」、thigh : 「サイ」、thing : 「シング」、through : 「スルー」、mouth : 「マウス」、等。

〔ð〕

mother : 「マザー」、they : 「ゼイ」、other : 「アザー」、breathe : 「ブリーズ」、this : 「ディス、ジス」、there : 「ゼア」、those : 「ゾーズ」、that : 「ザット」、等。

6) 子音連結や語尾の子音の表記 : 「子音 + 母音」のカタカナで表記

英語の子音連結 (consonant clusters) は、日本語にはあまり見られない音の連続であるので、日本語話者は各子音の直後に母音を添えて発音する傾向がある。例えば、strike [straík] や twelveth [twélvθ] は英語ではそれぞれ一拍で発音するが、これを日本語 (カタカナ英語) で表現すると、「ストライク」、「トウェルブス」となり、いずれも5拍で発音することになる。つまり、それぞれの子音の直後に母音を挿入して、[su-to-ra-i-ku]、[to-we-ru-bu-su] のように発音するからである。これでは英語音からかけ離れてしまい問題となる。したがって、このような表記を

改善する必要がある。

fault : 「フォールト」、touched net : 「タッチトネット」、partner : 「パートナー」、racket : 「ラケット」、handbook : 「ハンドブック」、side : 「サイド」、bound : 「バウンド」、side line : 「サイドライン」、end line : 「エンドライン」、let : 「レット」、court : 「コート」、doubles : 「ダブルス」、ball : 「ボール」、celluloid : 「セルロイド」、glass : 「ガラス」、point : 「ポイント」、racket hand : 「ラケットハンド」、seat : 「シート」、group : 「グループ」、list : 「リスト」、site : 「サイト」、skirt : 「スカート」、sport : 「スポーツ」、club : 「クラブ」、towel : 「タオル」、等。

1.2.2. 母音のカタカナ表記の問題点

1) [ei] と [ou] の表記 : 「ー」

英語の二重母音 [ei] を、日本人は舌の力を抜き、調音点がやや低くなった [ɛ] で発音したり、それを伸ばして [ɛ:] で発音する傾向にあり、カタカナ表記でも「ー」を用いることが多い。同じく二重母音 [ou] も、日本人は舌や唇を英語の場合ほどに緊張させないで、伸ばして発音する傾向にあり、英語の二重母音 [ou] も [ɔ:] も同じ発音となってしまう boat と bought が同音異義語となる。当然のことながらどちらの場合も英語の言語音とはかけ離れ、問題点の一つとなる。

game : 「ゲーム」、player : 「プレーヤー」、in play : 「インプレー」、table : 「テーブル」、slow play : 「スロープレー」、open : 「オープン」、maker : 「メーカー」、training suit : 「トレーニングスーツ」、name : 「ネーム」、doping control : 「ドーピングコントロール」、stroke counter : 「ストロークカウンター」、coach : 「コーチ」、blade : 「ブレード」

ド]、presentation : 「プレゼンテーション」、等。

2) 語尾の母音の長母音化 : 「ー」

強勢のない音節の母音を発音する際に、舌の緊張が緩み、中央化すると、あいまい母音 [ə] に近くなるのだが、これを「ー」でカタカナ表記するために、発音する際に必要以上に伸ばすことになり、英語の言語音から離れてしまうという問題がある。また、「母音直後の r (post-vocalic r)」の表記にもこの「ー」が使われることがあり、問題となる。

slow : 「スロー」、play : 「プレー」、wrong player : 「ウロンプレーヤー」、in play : 「インプレー」、rally : 「ラリー」、receiver : 「レシーバー」、partner : 「パートナー」、center line : 「センターライン」、rubber : 「ラバー」、rally : 「ラリー」、server : 「サーバー」、entry : 「エントリー」、maker : 「メーカー」、penalty : 「ペナルティー」、interval : 「インターバル」、adviser : 「アドバイザー」、manner : 「マナー」、member : 「メンバー」、the Jury : 「ザ・ジュリー」、voluntary test : 「ボランタリー」、等。

例外 : net assembly : 「ネットアセンブリ」

2. 審判宣告 (コール) 用語におけるカタカナ表記

すでに指摘したように、審判宣告用語を表すカタカナ表記は、いわば英語の「発音記号」としての役割があるのだから、できるだけ正確に英語音を反映するものでなければならない。そのような観点から、現行の『日本卓球ルールブック 2011 (平成 23 年版)』(財団法人日本卓球協会) および『卓球競技の審判法 2010 : 審判員の手引き (平成 22 年改訂版)』(財団法人日本卓球協会 : ルール・審判委員会) に掲載されている審判宣告用語の

現状を分析し、これら『ガイドブック』や『ルールブック』の本文で使われている「英語系カタカナ表記」についての前述の分析を踏まえて、その問題点・矛盾点を指摘し、その解決策を探る。

2.1. 現状

【審判宣告（コール）用語におけるカタカナ表記一覧】

『日本卓球ルールブック 2011』の「付録1」(p.26～28)より

「A ヴァーサス X。」 (“A versus X.”)

「ベスト オヴ 5 (7)。」 (“Best of 5 (7).”)

（「ベスト オヴ ファイヴ (セヴン)。」)

「ファースト ゲーム。A トゥ サーヴ。ラブオール。」（「ラブ オール。」)

（“First game. A to serve. Love all.”)

「11 - 9。ゲーム トゥ A。」 (“11-9. Game to A.”)

（「イレヴン-ナイン。ゲーム トゥ A。」)

「セカンド ゲーム。 X トゥ サーヴ。 ラヴ オール。」

（“Second game. X to serve. Love all.”)

「12 - 10。ゲーム トゥ X。」 (“12-10. Game to X.”)

（「トゥウエルヴ-テン。ゲーム トゥ X。」)

「サード ゲーム。 A トゥ サーヴ。 ラヴ オール。」

(“Third game. A to serve. Love all.”)

「11 - 8。ゲーム トウ X。」 (“11-8. Game to X.”)

(「イレヴン-エイト。ゲーム トウ X。」)

「フォース ゲーム。 X トウ サーヴ。 ラヴ オール。」

(“Fourth game. X to serve. Love all.”)

「11 - 5。ゲーム トウ A。」 (“11-5. Game to A.”)

(「イレヴン-ファイヴ。ゲーム トウ A。」)

「ファイナル (フィフス) ゲーム。 A トウ サーヴ。 ラヴ オール。」

(“Final (Fifth) game. A to serve. Love all.”)

「11 - 9。ゲーム アン (ド) マッチ トウ A。」

(“11-9. Game and match to A.”)

(「イレヴン-ナイン。ゲーム アン (ド) マッチ トウ A。」)

「レット」 (“Let.”)、 「フォールト」 (“Fault.”)、 「ウロンサイド」 (“Wrong side.”)、 「コレクション」 (“Correction.”)、 「ネット」 (“Net.”)、 「ストップ」 (“Stop.”)、 「サイド」 (“Side.”)、 「タイム」 (“Time.”)、 「タッチトネット」 (“Touched net.”)、 「ムーヴドテーブル」 (“Moved table.”)、 「ハンド・オン・テーブル」 (“Hand on table.”)、 「オブストラクション」 (“Obstruction.”)、 「ダブルバウンス」 (“Double bounce.”)、 「ダブルヒット」 (“Double hit.”)、 「ウロンプレーヤー」 (“Wrong player.”)、 「ウロンサイド」 (“Wrong side.”)、 等。 (句読点を一部筆者修正)

2.2. その評価と問題点

- 1) [v] の表記を「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」から「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」に変えている点は評価できる。日本語の [b] を「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」で、英語の [v] を「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」というように、両者を別々に表記でき、お互いに異なる調音法であることを具体的に示すことができるからである。

versus : 「ヴァーサス」、of : 「オヴ」、*“Love all”* : 「ラヴ オール」、*serve* : 「サーヴ」、*“Moved table”* : 「ムーヴドテーブル」、等。

- 2) [t] の表記に「トゥ」を用いて、英語の「無性・歯茎・閉鎖音 (voiceless alveolar stop)」を、日本語の「無声・歯・閉鎖音 (voiceless dental stop)」と区別している点が評価できるが、その他の言語環境では両者を区別できていない例が多々ある。語頭及び語中の場合は直後に来る母音によって「タ、チ、ツ、テ、ト」が使い分けられるのだが、語尾の場合は不思議なことに、ほとんど「ト」が使われる。

to : 「トゥ」、let : 「レット」、*“Time.”* : 「タイム」、*“Touched net.”* : 「タッチトネット」、table : 「テーブル」、*“Obstruction.”* : 「オブストラクション」、hit : 「ヒット」、等。

- 3) [ɹ] と [r] の表記については、どちらも「ラ、リ、ル、レ、ロ」で表記しており、英語の「有声・歯茎・側音」[ɹ] 及び英語の「有声・後部歯茎・半母音」[r] と日本語の「弾音 (flapped r)」との区別が表記できていない。

“Love all.”：「ラヴオール」、 “Let.”：「レット」、 “Fault.”：「フォールト」、 “Moved table.”：「ムーヴドテーブル」、 “Double bounce.”：「ダブルバウンス」、 “Double hit.”：「ダブルヒット」、 “Wrong player.”：「ウロンプレイヤー」、等。

- 4) [f] の表記には「ファ」、「フィ」、「フ」、「フェ」、「フォ」を用い、日本語にない「無声・唇歯・摩擦音」にあてている。日本語の、「ハ」[ha]、「ヒ」[çi]、「フ」[Φu]、「ヘ」[he]、「ホ」[ho] との調音法の違いを明確にする必要がある。

“First game.”：「ファーストゲーム」、 “Fourth game.”：「フォースゲーム」、 “Final game.”：「ファイナルゲーム」、 “Fault.”：「フォールト」、等。

- 5) 日本語にない英語の [θ] と [ð] (「無声(有声)・歯・摩擦音」) については、[s]、[z]、[dz]、[dʒ] などと同様、「サ」、「シ」、「ス」、「セ」「ソ」；「ザ」、「ジ」「ズ」、「ゼ」、「ゾ」を用いており、両音に独自の表記とはなっていない。

“Third game.”：「サードゲーム」、 “Fourth game.”：「フォースゲーム」、 “Fifth game.”：「フィフスゲーム」、等。

- 6) 子音連結や語尾の子音の表記に改善の余地がある。

前述のように、英語の子音連結 (consonant clusters) は、日本語にはあまり見られない音の連続であるので、日本語話者は各子音の直後に母音を挟んで発音する傾向がある。これでは英語音からかけ離れてしまい問題となる。したがって、このような表記を改善する必要がある。

versus : 「ヴァーサス」、best : 「ベスト」、all : 「オール」、second : 「セ
cond」、serve : 「サーヴ」、"Let." : 「レット」、"Fault." : 「フォールト」、
"Net." : 「ネット」、"Side." : 「サイド」、"Touched net." : 「タッチトネッ
ト」、"Moved table." : 「ムヴドテーブル」、等。

- 7) [ei] と [ou] の表記については、「エイ」や「オウ」の表記が用い
られ、改善がみられるが、すべてが改善されているわけではなく、一
貫性がない。例えば、game は「ゲーム」から「ゲイム」に改善され
てはいるが、table, wrong player, などでは「テーブル」「ウロンプレー
ヤー」であり、「テイブル（あるいはティバル）」「ウロンゲプレイヤー」
などとすべきであろう。

(類例)

slow play : 「スロープレー」、open : 「オープン」、maker : 「メーカー」、
training suit : 「トレーニングスーツ」、name : 「ネーム」、doping
control : 「ドーピングコントロール」、stroke counter : 「ストロークカ
ウンター」、coach : 「コーチ」、blade : 「ブレード」、presentation : 「プ
レゼンテーション」、等。

2.3. 解決策

以上、各種『ガイドブック』や『ルールブック』の本文中で使われている「英語系カタカナ表現」と審判宣告用語のカタカナ表記とに分けて、その問題点・矛盾点を指摘したのだが、今後に向けてその解決策を次に提案する。その際に、基本的には、英語の言語音に近い表現を前提としている。何故ならば、これらの文献を必要とする審判員をはじめとする卓球界の関係者の将来にとって、国際化時代に鑑み、それが望ましいと考えるか

らである。

そこで、専門用語あるいは発音記号としてのカタカナ表記の困難な点とその限界を確認したうえで、新たな解決策の可能性を模索する必要がある。まず、カタカナ表記の難しさとして、次の二つの大きな問題がある。

- 1) Stress timed rhythm 「強勢を核とするリズム」を基本とする英語の単語や句表現（の強弱パターン）を、syllable timed rhythm 「音節を核とするリズム」を基本とする日本語の分節音素表記としてのカタカナで表現しなければならないという難しさがある。まず、日本語の音節を表記するカタカナは、「ア、イ、ウ、エ、オ」と「ン」以外は基本的に「子音」＋「母音」を同時に表しており、両者を分割できない。したがって、子音連結や半母音などを含む英語の単語構造の発音を表現するのに無理がある。
- 2) 日本語と英語とでは、子音と母音の体系が異なるということに起因するカタカナ表記の限界が存在する。特に、日本語にない英語の各種音素（子音・母音）をカタカナでどう表記するかという困難な問題がある。
これらの困難な問題の幾つか解決するための方策として、
 - i) カタカナの小文字を活用する。
 - ii) つづり字からの脱却、即ちつづり字にとらわれないであくまで言語音に近いカタカナ表記を採用する。

以上2点を念頭において、前述の各問題点に対し、具体的な解決案を次に提案する。

- 1) [v] の表記：日本語 [b] と英語の [v] を区別して表記する。
「バ」、「ビ」、「ブ」、「ベ」、「ボ」→「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」、等。
[v]

of : 「アヴ」、serve : 「サーヴ」、"Love all." : 「ラヴ オール」、receiver : 「レシーヴァ」、executive committee : 「エグゼクティヴ・コミティ」、service : 「サーヴィス」、server : 「サーヴァ」、receive : 「レシーヴ」、interval : 「インタヴァル」、adviser : 「アドヴァイザ」、: level 「レヴェル」、television : 「テレヴィジョン」、voluntary test : 「ヴォランタリ検査」、等。

〔b〕

rubber : 「ラバァ」、handbook : 「ハンドブック」、table : 「ティブル、ティボウ」、bound : 「バウンド」、ball : 「ボール」、brand : 「ブランド」、bench : 「ベンチ」、等。

2) 〔t〕 の表記 : 「タ」、「ティ」、「トゥ」、「ツ」「テ」、「ト」

center line : 「センタァライン」、computer : 「コンピュータ」、net : 「ネッツ」、shorts : 「ショーツ」、web site : 「ウェブサイト」、shirt : 「シャーツ」、skirt : 「スカーツ」、racket : 「ラケッツ」、partner : 「パーツナァ」、let : 「レッツ」、return : 「リタァーン」、table : 「ティブル」、two : 「トゥ」、fault : 「フォールツ」、等。

3) 〔l〕 と 〔r〕 の表記 : 〔l〕 には 「ラ」、「リ」、「ル」、「レ」、「ロ」; 〔r〕 には 「ゥラ」、「ゥリ」、「ゥル」、「ゥレ」、「ゥロ」; 「母音直後の r」 には 「ァ」というように小文字を活用し、それぞれ区別して表記する。

〔l〕

playing surface : 「プレイングサーフェス」、side line : 「サイドライン」、doubles : 「ダブルス、ダボウス」、half court : 「ハーフコート」、net assembly : 「ネツァセンブリ」、ball : 「ボール、ボーウ」、celluloid : 「セルロイド」、plastic : 「プラスチック」、glass : 「グラス、ガラス」、rally : 「ラ

リイ]、let :「レッツ」 play :「プレイ」 singles :「シングルス」、Olympic :「オリンピック」、Paralympic :「パラリンピック」、logo :「ロゴ」、plus :「プラス」、list :「リスツ」、club :「クラブ」、lettering :「レタリング」、towel :「タオル」、floor mat :「フロアマツツ」、等。

[r]

rule :「ウルール」、right :「ウライト」、racket :「ウラケット」、rubber :「ウラバー」、rally [ウラリー]、free hand :「フリーハンズ」、obstruction :「アブストラクション」、return :「ウリターン」、receive :「ウレシーブ」、footrest :「フットウレスツ」、group :「グウグループ」、interval 「インタヴァール」、rank :「ウランク」、等。

4) [f] と [h] の表記：次のように、区別してして表記する。

「ファ」「フィ」「フ」「フェ」「フォ」；「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」

[f]

footrest :「フットレスツ」、fence :「フェンス」、fault :「フォールツ」、soft rubber :「ソフトラバァ」、free arm :「フリーアーム」、referee :「レフリー」、uniform :「ユニフォーム」、floor mat :「フロアマツツ」、alphabet :「アルファベツツ」、first :「ファースツ」、fourth :「フォース」、fifth :「フィフス」、free hand :「フリーハンズ」、film :「フィルム、フィウム」、*“Four all.”* :「フォア オール」、等。

[h]

Double hit :「ダブルヒツツ、ダボウヒツツ」、half court :「ハーフコーツ」、hair band :「ヘアバンズ」、hopes :「ホウプス」、pen holder :「ペンホルダァ」、*“Hand on table”* :「ハンド オン ティボウ」hand signal :「ハンズシグノウ」、hear band :「ヘアバンズ」等。

5) [θ] と [ð] の表記 :

「サ」、「シ」、「ス」、「セ」「ソ」; 「ザ」、「ジ」「ズ」、「ゼ」、「ゾ」

日本語にはこの音素はないので、前者は [s] で、後者は [z]、[dz]、[dʒ] などで代用し、「サ」、「シ」、「ス」、「セ」「ソ」; 「ザ」、「ジ」「ズ」、「ゼ」、「ゾ」などで表記する。それぞれ英語音とは異なるという問題があり、今後の課題である。

[θ]

third game : 「サーズゲーム」、fourth game : 「フォースゲーム」、fifth game : 「フィフスゲーム」、seventh : 「セブンス」、thumb up : 「サムアップ」、thirteen : 「サーティーン」、nothing : 「ナッシング」、thigh : 「サイ」、teeth : 「ティース」、thank : 「サンク」、thick : 「シック」、thing : 「シング」、through : 「スルー」、mouth : 「マウス」等。

[ð]

mother : 「マザァ」、they : 「ゼィ」、other : 「アザァ」、breathe : 「ブリーズ」、this : 「デイス」、there : 「ゼァ」、those : 「ゾーズ」、that : 「ザッツ」等。

6) 子音連結や語尾の子音の表記 : 「子音 + 母音」のカタカナで表記

すでに述べたように、英語の子音連結 (consonant clusters) は、日本語にはあまり見られない音の連続であり、子音と母音を分離表記できないカタカナによる表記法の難しさがある。この表記法については今後の課題であるが、小文字や記号を使用して工夫する可能性はある。

fault : 「フォーウツ」、touched net : 「タッチトネツツ」、partner : 「パートナー」、racket : 「ラケツツ」、handbook : 「ハンドゥブック」、side : 「サイド」、bound : 「バウンズ」、side line : 「サイドライン」、end line : 「エンズライン」、let : 「レツツ」、court : 「コート」、doubles : 「ダボウス」、ball :

「ボール」、celluloid : 「セルロイズ」、glass : 「グラス」、point : 「ポイント」、racket hand : 「ラケットハンズ」、seat : 「シート」、group : 「グループ」、list : 「リスト」、site : 「サイト」、skirt : 「スカート」、sport : 「スポーツ」、club : 「クラブ」、towel : 「タオル」等。

- 7) [ei] と [ou] の表記 : 「エイ」、「オウ」のように、小文字を使い、強弱の違いを示す。

game : 「ゲーム」、player : 「プレイヤー」、in play : 「インプレイ」、table : 「ティボウ」、slow play : 「スロウプレイ」、open : 「オープン」、maker : 「メイカ」、training suit : 「トレーニングスーツ」、name : 「ネーム」、doping control : 「ドゥピングコントロール」、stroke counter : 「ストロウクカウンタ」、coach : 「コウチ」、blade : 「ブレイド」、presentation : 「プレゼンテーション」、等。

- 8) 語尾の母音の長母音化 : 「ー」 → ϕ : 「ー」 → 「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」 実際には長母音ではないので、「ー」の表記を避けて小文字を使う。

slow : 「スロウ」、play : 「プレイ」、wrong player : 「ウロン(ク)プレイヤー」、in play : 「インプレイ」、rally : 「ラリー」、receiver : 「レシーバア」、partner : 「パートナーナア」、center line : 「センタァライン」、rubber : 「ラバア」、rally : 「ラリー」、server : 「サーバア」、entry : 「エントリー」、maker : 「メイカア」、penalty : 「ペナルティ」、interval : 「インタァバル」、adviser : 「アドバイザーア」、manner : 「マナア」、member : 「メンバア」、the Jury : 「ザ・ジュリイ」、voluntary test : 「ボランティア テスト」、net assembly : 「ネット アセンブリ」、等。

3. おわりに

発音記号としてのカタカナ表記が、英語の原音に限りなく近い音を表記すべきであるのは当然であり、また原音を引き出しやすいような表記を志向すべきであるのも当然であるが、『ガイドブック』や『ルールブック』の類における本文中で使われているカタカナ表記についても、できるだけ原音を反映した表記に近づける努力が必要であると考え。なぜなら、英語での試合の宣告を担当している審判員たちのほとんどは、これらの文献を熟読しており、これらのカタカナ表記の影響をもろに受けているからである。そこに存在する2種類のカタカナ表記の間において、一種の言語接触が生じており、世界各地で使用されている接触言語、ピジン・クレオールにおいて見られたようなピジン化やクレオール化と同様な現象に伴って生じる脱クレオール化に類似した現象、つまり「脱英語音化」が生じているからである。国際化時代を反映し、カタカナ英語を多用せざるを得ない各分野で、統一した表記を目指して、各種のガイドブック⁷が公開されているが、それらとのバランスを取りながら、できるだけ英語の原音を反映した表記を模索することが望ましい。

注

- 1 各都道府県及び市町村の卓球連盟が主催する卓球競技会から、東京選手権大会、全日本選手権大会、関東学生リーグなど全国レベルの上部大会に至るまで、試合中の公認審判員達による審判の宣告（コール）は、原則として「英語」で行われることになってはいるが、実はこの「英語」が問題である。試合中の限られた宣告用語についてのみ、まがりなりにも、『卓球競技の審判法 2011：審判員の手引き』をはじめとする各種ルールブックに記載されているカタカナ表記をそのまま、英語というよりは日本語的英語の発音で、コールしているのが現実であり、しかもそれ以外の、選手やアド

バイザー、副審、監督などとのコミュニケーション（例えば、試合前のラケットや服装の点検、サービスやボールの選択のためのトスの指示、ゲーム間での副審との申し合わせ、監督への警告の解説など）は、すべて日本語で対応している。したがって審判員達は、試合中は日本語と英語のいわばバイリンガル状態にある。

- 2 日本人の審判員達は自分の審判活動のレベルを維持するために、常日頃からこれらの『ルールブック』や『ガイドブック』を熟読しているわけであるから、ますますこれらの本文で使われている「日本語」としての「カタカナ表記」に示された発音の影響を受けることになる。これは言語接触に見られる現象の一種で、いわば「脱英語化」現象といえる。『ガイドブック』や『ルールブック』の本文に示された「日本語」としてのカタカナ表記の発音と、審判の宣告用語として示されている「英語」の発音記号としてのカタカナ表記の発音との言語接触が、審判員達の頭の中で発生し、圧倒的な量を占める前者の影響を受けて、英語本来の発音の特徴が削られるという現象が生ずるのであり、これも言語接触の諸相の一つといえよう。
- 3 本来ならば、国際音声学会で決められた発音記号 IPA (International Phonetic Alphabet) で表記するのが最も正確で、適切である。そして、これに基づいて音声学に通じた専門家が、講習会などの場で、直接審判員に指導教授するのが筋であろう。すべての審判員が英語の発音や発音記号について十分な知識や発音技術を備えているとは限らないからである。それをあえて「カタカナ表記」を用いることに大きな矛盾があるといえる。しかし、IPA も「カタカナ表記」も言語音そのものではないのであるから、程度の差はあれ、「発音記号」の一種に変わりはない。とすれば、この「カタカナ表記」を、より英語の言語音に近い音を生み出しやすいような表記に改善するという現実的な解決策を模索することができよう。
- 4 杉本（2009b：85-6）を参照。
- 5 杉本（2009b：101-7）を参照。
- 6 「K-18」は『国際卓球ルール（2010-2011）』（日本卓球協会）の18頁であることを示す。この例のように、同じルールブックの中でも、「エクゼクティブ」と「コミッティ」の間に・を入れる場合と入れない場合があり不統一である。また「コミティ」と「コミッティ」など、この種の不統一は他の

『ルールブック』にも散見される。

- 7 社団法人共同通信社『記者ハンドブック第10版』(株)共同通信社2006年。
新聞用語懇談会『新聞用語集』日本新聞協会1996年。
朝日新聞社用語漢字『最新版 朝日新聞の用語の手引き』朝日新聞社2002年。
毎日新聞社『毎日新聞 用語集』毎日新聞社2002年。
読売新聞社『読売新聞 用字用語の手引き』中央公論新社2005年。
NHK放送文化研究所『NHK日本語発音アクセント辞典(新版)』日本放送出版協会1998年。
NHK放送文化研究所『NHKことばのハンドブック第2版』日本放送出版協会2005年。
石渡敏雄『基本外来語辞典』東京堂出版1990年。
岸本重陳『国際化時代のためのカタカナ語・略語辞典』旺文社1990年。
講談社編『最新カタカナ語辞典 第二版』(講談社プラスα文庫)(株)講談社2000年。
三省堂編修所『官公庁のカタカナ語辞典 第2版』三省堂1998年。
イミダス編集部『Imidas 現代人のカタカナ語欧文略語辞典』集英社2006年。
日本規格協会『JIS工業用語大辞典 第5版』日本規格協会2001年。

【参考文献】

- Davies, Diane. 2005. *Varieties of Modern English: An Introduction*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Gorlach, Manfred. 1991. *Englishes: Studies in Varieties of English 1984-1988. Varieties of English around the World*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Sebba, Mark. 2007. *Spelling and Society: The Culture and Politics of Orthography around the World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wells, J. C. 1982. *Accents of English*, vols. I-III. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石渡敏雄(1990)『基本外来語辞典』東京堂出版1990年。
- 杉本豊久(2001)「爆発する英語：グローバル英語の時代」『英語教育』Vol.50, No.2 大修館書店2001年。
- _____ (2007)「グラスゴー方言－その音韻・つづり字法・語彙－」『成城文藝』第200号。

- _____ (2008a) 「Tok Pisin のつづり字法・語彙・句表現－その単純化と合理性－」『成城イングリッシュモノグラフ』第 40 号。
- _____ (2008b) 「世界のピジン・クレオール英語－言語接触の諸相－」矢野安剛・池田雅之編『英語世界のことばと文化』成文堂 263-285 頁。
- _____ (2009a) 「現代英語の変異性－トク・ピシン、ジャマイカン・クレオールおよびグラスゴー方言の音韻とつづり字の比較－(1)」『成城大学共通教育論集』第 1 号。
- _____ (2009b) 「日英語の変異性－英語変種のつづり字表記と日本語カタカナ表記の比較分析－」『成城文藝』208 号。
- _____ (2010) 「現代英語の変異性－トク・ピシン、ジャマイカン・クレオールおよびグラスゴー方言の音韻とつづり字の比較－(2)」『成城大学共通教育論集』第 2 号。
- 竹林 滋 (1982) 『英語音声学入門』大修館書店。
- 松井千枝 (1996) 『英語音声学－日本語との比較による－(改訂版)』朝日出版。
- テクニカルコミュニケーター協会 (2008) 『外来語(カタカナ)表記ガイドライン第 2 版』同協会、カタカナ表記検討ワーキンググループ。
- 財団法人日本卓球協会ルール・審判委員会 (2010) 『卓球の審判法 2010：審判員の手引き(平成 22 年改訂版)』財団法人日本卓球協会。
- 財団法人日本卓球協会 (2010) 『国際卓球ルール(2010-2011)』財団法人日本卓球協会。
- 財団法人日本卓球協会 (2011) 『日本卓球ルールブック(平成 23 年版)』財団法人日本卓球協会。